

谷崎潤一郎集
(一)

日本文学全集 18



筑摩書房

日本文学全集18 谷崎潤一郎集(一)

昭和四十五年十一月一日発行

著者 谷崎潤一郎

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話東京二九一―七六五一(代表)

振替東京四一二三

本文整版 株式会社精興社

本文印刷 多田印刷株式会社

製本 協和製本株式会社

谷崎潤一郎集 (一) 目次

痴人の愛

五

蓼喰ふ蟲

一七三

盲目物語

二七六

蘆刈

三九

春琴抄

三七

鍵

四九

人と文学

山本健吉 四二

口絵写真提供 「マドモアゼル」編集部

谷崎潤一郎集
(一)

美代日のふと
ふと目のふと
秋のふと
秋のふと

に一
郎

痴人の愛

—

私は此れから、あまり世間に類例がないだらうと思はれる私達夫婦の間柄に就いて、出来るだけ正直に、ざつくばらんに、有りのまゝの事實を書いて見ようと思ひます。それは私自身に取つて忘れたくない貴い記録であると同時に、恐らくは讀者諸君に取つても、きつと何かの參考資料となるに違ひない。殊に此の頃のやうに日本もだん／＼國際的に顔が廣くなつて來て、内地人と外國人とが盛んに交際する、いろんな主義やら思想やらが這入つて來る、男は勿論女もどし／＼ハイカラになる、と云ふやうな時勢になつて來ると、今まではあまり類例のなかつた私たちの如き夫婦關係も、追ひ／＼諸方に生じるだらうと思はれますから。

考へて見ると、私たち夫婦は既にその成り立ちから變つてゐました。私が始めて現在の私の妻に會つたのは、ちやうど足かけ八年前のことになります。尤も何月の何日だつたか、委しいことは覚えてゐませんが、兎に角その時分、彼

女は淺草の雷門の近くにあるカフエ・ダイヤモンドと云ふ店の、給仕女をしてゐたのです。彼女の歳はやつと數へ歳の十五でした。だから私が知つた時はまだそのカフエへ奉公に來たばかりの、ほんの新米だつたので、一人前の女給ではなく、その見習ひ、——まあ云つて見れば、ウエイトレスの卵に過ぎなかつたのです。

そんな子供をもうその時は二十八にもなつてゐた私が何で眼をつけたかと云ふと、それは自分でもハツキリとは分りませんが、多分最初は、その兒の名前が氣に入つたからなのでせう。彼女はみんなから「直ちゃん」と呼ばれてゐましたけれど、或るとき私が聞いて見ると、本名は奈緒美と云ふのでした。此の「奈緒美」といふ名前が、大變私の好奇心に投じました。「奈緒美」は素敵だ、NAOMIと書くともんで西洋人のやうだ、と、さう思つたのが始まりで、それから次第に彼女に注意し出したのです。不思議なもので名前がハイカラだとなると、顔だちなども何處か西洋人臭く、さうして大そう俐巧さうに見え、「こんな所の女給にして置くのは惜しいものだ」と考へるやうになつたのです。

實際ナオミの顔だちは、(斷つて置きますが、私はこれから彼女の名前を片假名で書くことにします。どうもさうしないと感じが出ないのです)活動女優のメリー・ピクフォードに似たところがあつて、確かに西洋人じみてゐました。此れは決して私のひいき眼ではありません。私の妻となつ

てゐる現在でも多くの人がさう云ふのですから、事實上に違ひないのです。そして顔だちばかりでなく、彼女を素つ裸にして見ると、その體つきが一層西洋人臭いのですが、それは勿論後になつてから分つたことで、その時分には私もそこまでは知りませんでした。たゞおぼろげに、きつとあふふスタイルなら手足の恰好も悪くはなからうと、着物の着こなし工合から想像してゐただけでした。

一體十五六の少女の氣持と云ふものは、肉親の親か姉妹でもなければ、なか／＼分りにくいものです。だからカフエエにゐた頃のナオミの性質がどんなだつたかと云はれると、どうも私には明瞭な答へが出来ません。恐らくナオミ自身にしたつて、あの頃はたゞ何事も夢中で過したと云ふだけでせう。が、ハタから見た感じを云へば、執方かと云ふと、陰鬱な、無口な兒のやうに思へました。顔色なども少し青みを帯びてゐて、譬へば斯う、無色透明な板ガラスを何枚も重ねたやうな、深く沈んだ色合をしてゐて、健康さうではありませんでした。此れは一つにはまだ奉公に來たてだつたので、外の女給のやうにお白粉もつけず、お客や朋輩にも馴染がうすく、隅の方に小さくなつて黙つてチヨコチヨコ働いてゐたものだから、そんな風に見えたのでせう。そして彼女が惻巧さうに感ぜられたのも、やつぱりそのせゐだつたかも知れません。

こゝで私は、私自身の經歷を説明して置く必要がありますが、私は當時月給百五十圓を貰つてゐる、或る電気會社の

技師でした。私の生れは栃木縣の宇都宮在で、國の中學校を卒業すると東京へ來て藏前（くらゐ）の高等工業へ這入り、そこを出てから間もなく技師になつたのです。そして日曜を除く外は、毎日芝口の下宿屋から大井町の會社へ通つてゐました。

一人で下宿住居をしてゐて、百五十圓の月給を貰つてゐたのですから、私の生活は可成り樂でした。それに私は、總領息子ではありましたが、郷里の方の親やきやうだいへ仕送りをする義務はありませんでした。と云ふのは、實家は相當に大きく農業を営んでゐて、もう父親は居ませんでした。が、年老いた母親と、忠實な叔父夫婦とが、萬事を切り盛りしてゐてくれたので、私は全く自由な境涯にあつたのです。が、さればと云つて道樂をするのもありませんでした。先づ模範的なサラリー・マン、——質素で、眞面目で、あんまり曲がなさ過ぎるほど凡庸で、何の不平も不満もなく日々の仕事を勤めてゐる、——當時の私は大方そんな風だつたでせう。「河合讓治君」と云へば、會社の中でも「君子」といふ評判があつたくらいですから。

それで私の娛樂と云つたら、夕方から活動寫眞を見に行くとか、銀座通りを散歩するとか、たま／＼奮發して帝劇へ出かけるとか、せい／＼そんなものだつたのです。尤も私も結婚前の青年でしたから、若い女性に接觸することは無論嫌ひではありませんでした。元來が田舎育ちの無骨者なので、人づきあひが拙く、従つて異性との交際などは一つ

もなく、まあ其のために「君子」にさせられた形だつたでもありませんが、しかし表面が君子であるだけ、心の中はなか／＼油斷なく、往來を歩く時でも毎朝電車に乗る時でも、女に對しては絶えず注意を配つてゐました。恰もさう云ふ時期に於いて、たま／＼ナオミと云ふ者が私の眼の前に現れて來たのです。

けれど私は、その當時、ナオミ以上の美人はないときめてゐた譯では決してありません。電車の中や、帝劇の廊下や、銀座通りや、さう云ふ場所であつた。ナオミの器量がよくなるかどうかは將來の問題で、十五やそこらの小娘では此れから先が楽しみでもあり、心配でもあつた。ですから最初の私の計畫は、兎に角此の兒を引き取つて世話をしてやらう。そして望みがありさうなら、大いに教育してやつて、自分の妻に貰ひ受けても差支へない。——と、云ふくらゐな程度だつたのです。此れは一面から云ふと、彼女に同情した結果なのですが、他の一面には私自身のあまりに平凡な、あまりに單調なその日暮らしに、多少の變化を興へて見たかつたからでもあるのです。正直のところ私は長年の下宿住居に飽きてゐたので、何とかして、此の殺風景な生活に一點の色彩を添へ、溫かみを加へて見たいと思つてゐました。それにはたとひ小さくとも一軒の家を構へ、部屋を飾るとか、花を植ゑるとか、日あたりのいい、ゾランダに小鳥の籠を吊るすとかして、臺所の用事や、拭

き掃除をさせるために女中の一人も置いたらどうだらう。そしてナオミが來てくれたらば、彼女は女中の役もしてくれ、小鳥の代りにもなつてくれよう。と、大體そんな考でした。

そのくらゐなら、なぜ相當な所から嫁を迎へて、正式な家庭を作らうとしなかつたのか？——と云ふと、要するに私はまだ結婚をするだけの勇氣がなかつたのでした。此れに就いては少し委しく話さなければなりません。一體私は常識的な人間で、突飛なことは嫌ひな方だし、出来もしなかつたのですけれど、しかし不思議に、結婚に對しては可なり進んだ、ハイカラな意見を持つてゐました。「結婚」と云ふと世間の人は大そう事を堅苦しく、儀式張らせる傾向がある。先づ第一に橋渡しと云ふものがあつて、それとなく雙方の考をあたつて見る。次には「見合ひ」といふ事をする。さてその上で雙方に不服がなければ改めて媒人を立て、結納を取り交し、五荷とか、七荷とか、十三荷とか、花嫁の荷物を婚家へ運ぶ。それから輿入れ、新婚旅行、里歸り、……と随分面倒な手續きを蹈みますが、さう云ふことがどうも私は嫌ひでした。結婚するならもつと簡單な、自由な形式でしたいものだと思つてゐました。

あの時分、若しも私が結婚したいなら候補者は大勢あつたでせう。田舎者ではありますけれども、體格は頑丈だし、品行は方正だし、さう云つては可笑しいが男前も普通であるし、會社の信用もあつたのですから、誰でも喜んで世話

をしてくれたでせう。が、實のところ、この「世話」をされる」と云ふ事がイヤなのだから、仕方がありませんでした。たとひ如何なる美人があつても、一度や二度の見合ひでもつて、お互の意氣や性質が分る筈はない。「まあ、あれならば」とか、「ちよつときれいだ」とか云ふくらゐな、ほんの一時の心持で一生の伴侶を定めるなんて、そんな馬鹿なことが出来るものぢやない。それから思へばナオミのやうな少女を家に引き取つて、徐にその成長を見届けてから氣に入つたらば妻に貰ふと云ふ方法が一番いい。何も私は財産家の娘だの、教育のある偉い女が欲しい譯ではないのですから、それで澤山なのでした。

のみならず、一人の少女を友達にして、朝夕彼女の發育のさまを眺めながら、明るく晴れやかに、云はゞ遊びのやうな氣分で、一軒の家に住むと云ふことは、正式の家庭を作るのとは違つた、又格別な興味があるやうに思へました。つまり私とナオミでたわいのないまごどをする。「世帯を持つ」と云ふやうなシチ面倒臭い意味でなしに、呑氣なシンブル・ライフを送る。——此れが私の望みでした。實際今の日本の「家庭」は、やれ筆笥だとか、長火鉢だとか、座布團だとか云ふ物が、あるべき所に必ずなければいけないかつたり、主人と細君と下女との仕事がいやにキチンと分れてゐたり、近所隣りや親類同士の附き合ひがうるさかつたりするので、その爲めに餘計な入費も懸るし、簡単に濟ませることが煩雜になり、窮屈になるし、年の若いサラリ

1・マンには決して愉快なことでもなく、いゝことでもありません。その點に於いて私の計畫は、たしかに一種の思ひつきだと信じました。

私がナオミに此のことを話したのは、始めて彼女を知つてから二た月ぐらゐ立つた時分だつたでせう。その間、私は始終、暇さへあればカフエ・ダイヤモンドへ行つて、出来るだけ彼女に親しむ機會を作つたものでした。ナオミは大變活動寫眞が好きでしたから、公休日には私と一緒に公園の館を覗きに行つたり、その歸りにはちよつとした洋食屋だの、蕎麥屋だのへ寄つたりしました。無口な彼女はそんな場合にもいたつて言葉數が少い方で、嬉しいのだから詰まらないのだか、いつも大概はむつとりとしてゐます。そのくせ私が誘ふときは、決して「いや」とは云ひませんでした。「えゝ、行つてもいいわ」と、素直に答へて、何處へでも附いて行くのでした。

一體私をどう云ふ人間と思つてゐるのか、どう云ふつもりで附いて来るのか、それは分りませんでした。が、まだほんたうの子供なので、彼女は「男」と云ふ者に疑ひの眼を向けようとしなない。此の「伯父さん」は好きな活動へ連れて行つて、とき／＼御馳走をしてくれるから、一緒に遊びに行くのだと云ふだけの、極く單純な、無邪氣な心持でゐるのだらうと、私は想像してゐました。私にしたつて、全く子供のお相手になり、優しい親切な「伯父さん」となる以上のことは、當時の彼女に望みもしなければ、素振りに

見せはしなかつたのです。あの時分の、淡い、夢のやうな月日のことを考へ出すと、お伽噺の世界にでも住んでゐたやうで、もう一度あゝ云ふ罪のない二人になつて見たいと、今でも私はさう思はずにはゐられません。

「どうだね、ナオミちゃん、よく見えるかね？」

と、活動小屋が満員で、空いた席がない時など、うしろの方に並んで立ちながら、私はよくそんな風に云つたものです。するとナオミは、

「いゝえ、ちつとも見えないわ」

と云ひながら一生懸命に背伸びをして、前のお客の首と首の間から覗かうとする。

「そんなにしたつて見えやしないよ、此の木の上へ乗つかつて、私の肩に縋まつて御覽」

さう云つて私は、彼女を下から押し上げてやつて、高い手すりの横木の上へ腰をかけさせる。彼女は兩足をぶらんぶらんさせながら、片手を私の肩にあてがつて、やつと満足したやうに、息を凝らして繪の方を視つめる。

「面白いかい？」

と云へば、

「面白いわ」

と云ふだけで、手を叩いて愉快がつたり、跳び上つて喜んだりするやうなことにはないのですが、賢い犬が遠い物音を聞き澄ましてゐるやうに、黙つて、惻巧さうな眼をパツチリ開いて見物してゐる顔つきは、餘程寫眞が好きなのだと

頷かれました。

「ナオミちゃん、お前お腹が減つてやしないか？」

さう云つても、

「いゝえ、なんにも喰べたくない」

と云ふこともありすが、減つてゐる時は遠慮なく「えゝ」と云ふのが常でした。そして洋食なら洋食、お蕎麥ならお蕎麥と、尋ねられればハツキリと喰べたい物を答へました。

二

「ナオミちゃん、お前の顔はメリー・ピックフォードに似てゐるね」

と、いつのことでしたか、ちやうどその女優の映畫を見てから、歸りにとある洋食屋へ寄つた晩に、それが話題に上つたことがあります。

「さう」

と云つて、彼女は別にうれしさうな表情もしないで、突然そんなことを云ひ出した私の顔を不思議さうに見ただけでしたが、

「お前はさうは思はないかね」

と、重ねて聞くと、

「似てゐるかどうかわからないけれど、でもみんなが私のことを混血兒みたいだつてさう云ふわよ」

と、彼女は濟まして答へるのです。

「そりやさうだらう、第一お前の名前からして變つてゐるもの、ナオミなんてハイカラな名前を、誰がつけたんだね」

「誰がつけたか知らないわ」

「お父つあんかねお祖母さんかね、——」

「誰だか、——」

「ぢやあ、ナオミちゃんのお父つあんは何の商賣をしてるんだい」

「お父つあんはもう居ないの」

「お祖母さんは？」

「お祖母さんは居るけれど、——」

「ぢや、兄弟は？」

「兄弟は大勢あるわ、兄さんだの、姉さんだの、妹だの、——」

それから後もこんな話はたび／＼出たことがありますけれど、いつも彼女は、自分の家庭の事情を聞かれると、ちよつと不愉快な顔つきをして、言葉を濁してしまふのでした。で、一緒に遊びに行くときは大概前の日に約束をして、きめた時間に公園のベンチとか、観音様のお堂の前とかで待ち合はせることにしたのですが、彼女は決して時間を違へたり、約束をすつぽかしたりしたことはありませんでした。何かの都合で私の方が遅れたりして、「あんまり待たせ過ぎたから、もう歸つてしまつたかな」と、案じながら行つて見ると、矢張キチンと其處に待つてゐます。そして

私の姿に氣が付くと、ふいと立ち上つてつかつか此方へ歩いて來るのです。

「御免よ、ナオミちゃん、大分長いこと待つただらう」

私がさう云ふと、

「えゝ、待つたわ」

と云ふだけで、別に不平さうな様子もなく、怒つてゐるらしくもないのでした。或る時などはベンチに待つてゐる約束だつたのが、急に雨が降り出したので、どうしてゐるかと思ひながら出かけて行くと、あの、池の側にある何様だかの小さい祠の軒下にしゃがんで、それでもちゃんと待つてゐたのには、ひどくいぢらしい氣がしたことがあります。

さう云ふ折の彼女の服裝は、多分姉さんのお譲りらしい古ぼけた銘仙の衣類を着て、めりんす友禪の帶をしめて、髪も日本風の桃割れに結び、うすくお白粉を塗つてゐました。そしていつでも、繼ぎはあたつてゐましたけれど、小さな足にビツチリと簞はまつた、恰好のいゝ白足袋はを穿はいてゐました。どういふ譯で休みの日だけ日本髪にするのかと聞いて見ても「内でさうしろと云ふもんだから」と、彼女は相變らず委はしい説明はしませんでした。

「今夜はおそくなつたから、家の前まで送つて上げよう」

私は再々、さう云つたこともありましたが、
「いゝわ、直ちき近所だから獨りで歸れるわ」

と云つて、花屋敷の角まで来ると、きつとナオミは「左様なら」と云ひ捨てながら、千束町の横丁の方へバタバタ駆け込んでしまふのでした。

さうです、——あの頃のことを餘りくどくど記す必要はありませんが、一度私は、やゝ打ち解けて、彼女とゆつくり話をした折がありましたつけ。

それは何でもしとしと春雨の降る、生暖い四月の末の宵だつたでせう。ちやうど其晩はカフエエが暇で、大そう静かだつたので、私は長いことテーブルに構へて、ちび／＼酒を飲んでゐました。——かう云ふとひどく酒飲みのやうですけれど、實は私は甚だ下戸の方なので、時間つぶしに、女の飲むやうな甘いコクテルを拵へて貰つて、それをホンの一と口づゝ、舐めるやうに吸つてゐたのに過ぎないので、そこへ彼女が料理を運んで来てくれたので、

「ナオミちゃん、まあちよつと此處へおかけ」と、いくらか酔つた勢でさう云ひました。

「なあに」

と云つて、ナオミは大人しく私の側へ腰をおろし、私がポケットから敷島を出すと、すぐにマツチを擦つてくれました。

「まあ、いゝだらう、此處で少うししや、つて行つても。

——今夜はあまり忙しくもなさうだから」

「えゝ、こんなことはめつたにありはしないのよ」

「いつものそんなに忙しいかい？」

「忙しいわ、朝から晩まで、——本を読む暇もありやしな

いわ」

「ぢやあナオミちゃんは、本を読むのが好きなんだね」

「えゝ、好きだわ」

「一體どんな物を読むのさ」

「いろ／＼な雑誌を見るわ、読む物なら何でもいゝの」

「そりや感心だ、そんなに本が讀みたかつたら、女學校へでも行けばいゝのに」

私はわざとさう云つて、ナオミの顔を覗き込むと、彼女は癪に觸つたのか、つんと濟まして、あらぬ方角をじつと視つめてゐるやうでしたが、その眼の中には、明かに悲しいやうな、遺る瀨ないやうな色が浮かんてゐるのでした。

「どうだね、ナオミちゃん、ほんたうにお前、學問をした

ど」

それでも彼女が黙つてゐますから、私は今度は慰めるやうな口調で云ひました。

「え？ ナオミちゃん、黙つてゐないで何とかお云ひよ。

お前は何をやりたいんだい。何が習つて見たいんだい？」

「あたし、英語が習ひたいわ」

「ふん、英語と、——それだけ？」

「それから音楽もやつてみたいの」

「ぢや、僕が月謝を出してやるから、習ひに行つたらいいぢやないか」

「だつて女學校へ上るのには遅過ぎるわ。もう十五なんですもの」

「なあに、男と違つて女は十五でも遅くはないさ。それとも英語と音楽だけなら、女學校へ行かないだつて、別に教師を頼んだらいいさ。どうだい、お前眞面目にやる氣があるかい？」

「あるにはあるけれど、——ぢや、ほんたうにやらしてくれる？」

さう云つてナオミは、私の眼の中を俄かにハツキリ見据ゑました。

「あゝ、ほんたうとも。だがナオミちゃん、もしさうなれば此處に奉公してゐる譯には行かなくなるが、お前の方はそれで差支へないのかね。お前が奉公を止めていゝなら、僕はお前を引取つて世話をしていてもいいんだけれど。……さうして何處までも責任を以て、立派な女に仕立てゝやりたいと思ふんだけれど」

「えゝ、いゝわ、さうしてくれゝば」

何の躊躇するところもなく、言下に答へたキツバリとした彼女の返辭に、私は多少の驚きを感じないではゐられませんでした。

「ぢや、奉公を止めると云ふのかい？」

「えゝ、止めるわ」

「だけどナオミちゃん、お前はそれでいゝにしたつて、お母さんや兄さんが何と云ふか、家の都合を聞いて見なけ

りやならないだらうが」

「家の都合なんか、聞いて見ないでも大丈夫だわ。誰も何とも云ふ者はありやしないの」

と、口ではさう云つてゐたものの、その實彼女がそれを案外氣にしてゐたことは確かでした。つまり彼女のいつもの癖で、自分の家庭の内幕を私に知られるのが嫌さに、わざと何でもないやうな素振りを見せてゐたのです。私もそんなに嫌がるものを無理に知りたくはないのでしたが、しかし彼女の希望を實現させる爲めには、矢張どうしても家庭を訪れて彼女の母なり兄なりに篤と相談をしなければならぬ。で、二人の間にその後だん／＼話が進行するに従ひ、「一遍お前の身内の人に會はしてくれろ」と、何度もさう云つたのですけれど、彼女は不思議に喜ばないで、

「いゝのよ、會つてくれないでも。あたし自分で話をするわ」

と、さう云ふのが極まり文句でした。

私はこゝで、今では私の妻になつてゐる彼女の爲めに、「河合夫人」の名譽の爲めに、強ひて彼女の不機嫌を買つてまで、當時のナオミの身許や素性を洗ひ立てる必要はありませんから、成るべくそれには觸れないことにして置きます。後で自然と分つて來る時もありませうし、さうでない迄も彼女の家が千束町にあつたこと、十五の歳にカフエエの女給に出されてゐたこと、そして決して自分の住居を人に知らせようとしなかつたことなどを考へれば、大凡

そどんな家庭であつたかは誰にも想像がつく筈ですから。いや、そればかりではありません、私は結局彼女を説き落して母だの兄だのに會つたのですが、彼等は殆ど自分の娘や妹の貞操と云ふことに就いては、問題にしてゐないのでした。私が彼等に持ちかけた相談と云ふのは、折角當人も學問が好きだと云ふし、あんな所に長く奉公させて置くのも惜しい兄のやうに思ふから、其方でお差支へがないのなら、どうか私に身柄を預けては下さるまいか。どうせ私も十分な事は出来まいけれど、女中が一人欲しいと思つてゐた際でもあるし、まあ臺所や拭き掃除の用事ぐらゐはして貰つて、そのあひ間に一通りの教育はさせて上げますが、と、勿論私の境遇だのまだ獨身であることなどをすつかり打ち明けて頼んで見ると、「さうして戴ければ誠に當人も仕合はせてして、……」と云ふやうな、何だか張合ひがなさ過ぎるくらゐな挨拶でした。全く此れではナオミの云ふ通り、會ふ程のことはなかつたのです。

世の中には随分無責任な親や兄弟もあるものだ、私は、その時つく／＼と感じましたが、それだけ一層ナオミがいちらしく、哀れに思へてなりませんでした。何でも母親の言葉に依ると、彼等はナオミを持って扱つてゐたらしいので、「實は此の兒は藝者にする筈でございましたのを、當人の氣が進みませんのですから、さういつ迄も遊ばせて置く譯にも參らず、據んどころなくカフエエへやつて置きましたので」と、そんな口上でしたから、誰かゞ彼女を引き取

つて成人させてくれさへすれば、まあ兎も角も一と安心だと云ふやうな次第だつたのです。あゝ成る程、それで彼女は家にゐるのが嫌だものだから、公休日にはいつも戸外へ遊びに出て、活動寫眞を見に行つたりしたんだと、事情を聞いてやつと私もその謎が解けたのでした。

が、ナオミの家庭がさう云ふ風であつたことは、ナオミに取つても私に取つても非常に幸だつた譯で、話が極まると直きに彼女はカフエエから暇を貰ひ、毎日々々私と二人で適當な借家を捜しに歩きました。私の勤め先が大井町でしたから、成るべくそれに便利な所を選ばうと云ふので、日曜日には朝早くから新橋の驛に落ち合ひ、さうでない日はちやうど會社の退けた時刻に大井町で待ち合はせて、蒲田大森、品川、目黒、主としてあの邊の郊外から、市中では高輪や田町や三田あたりを廻つて見て、さて歸りには何處かで一緒に晩飯をたべ、時間があれば例の如く活動寫眞を覗いたり、銀座通りをぶらついたりして、彼女は千束町の家へ、私は芝口の下宿へ戻る。たしかその頃は借家が拂底な時でしたから、手頃な家がなか／＼オイソレと見つからないで、私たちは半月あまり斯うして暮らしたものでした。

もしもあの時分、麗かな五月の日曜日の朝などに、大森あたりの青葉の多い郊外の路を、肩を並べて歩いてゐる會社員らしい一人の男と、桃割れに結つた見すばらしい小娘の様子を、誰かゞ注意してゐたとしたら、まあどんな風に思

へたでせうか？ 男の方は小娘を「ナオミちゃん」と呼び、小娘の方は男を「河合さん」と呼びながら、主従ともつかず、兄妹ともつかず、さればと云つて夫婦とも友達ともつかぬ恰好で、互に少し遠慮しい／＼語り合つたり、番地を尋ねたり、附近の景色を眺めたり、ところ／＼の生垣や、邸の庭や、路端などに咲いてゐる花の色香を振り返つたりして、晩春の長い一日を彼方此方と幸福さうに歩いてゐた此の二人は、定めし不思議な取り合はせだつたに違ひありません。花の話で想ひ出すのは、彼女が大變西洋花を愛してゐて、私などにはよく分らない／＼な花の名前——それも面倒な英語の名前を澤山知つてゐたことでした。カフエに奉公してゐた時分に、花瓶の花を始終扱ひつけてゐたので自然に覺えたのださうですが、通りすがりの門の中なぞに、たま／＼温室があつたりすると、彼女は眼敏くも直ぐ立ち止まつて、

「まあ、綺麗な花！」

と、さも嬉しうに叫んだものです。

「ちや、ナオミちゃんは何の花が一番好きだね」と、尋ねてみたとき、

「あたし、チューリップが一番好きよ」と、彼女はさう云つたことがあります。

淺草の千束町のやうな、あんなゴミゴミした路次の中に育つたので、却つてナオミは反動的にひろ／＼とした田園を慕ひ、花を愛する習慣になつたのでありませうか。董、た

んば、げんげ、櫻草、——そんな物でも畑の畔や田舎道などに生えてゐると、忽ちチヨコチヨコと驅けて行つて摘まうとする。そして終日歩いてゐるうちに彼女の手には摘まれた花が一杯になり、幾つとも知れない花束が出来、それを大事に歸り途まで持つて來ます。

「もうその花はみんな萎んでしまつたぢやないか、好い加減に捨て、おしまひ」

さう云つても彼女はなか／＼承知しないで、

「大丈夫よ、水をやつたら又直ぐ生きツ返るから、河合さんの机の上へ置いたらいいわ」と、別れるときにその花束をいつも私にくれるのでした。

かうして方々捜し廻つても容易にいゝ家が見つからないで、散々迷ひ抜いた揚句、結局私たちが借りることになつたのは、大森の驛から十二三町行つたところの省線電車の線路に近い、とある一軒の甚だお粗末な洋館でした。所謂「文化住宅」と云ふ奴、——まだあの時分はそれがそんなに流行つてはゐませんでした。近頃の言葉で云へばさしづめさう云つたものだつたでせう。勾配の急な、全體の高さの半分以上もあるかと思はれる、赤いスレートで葺いた屋根。マツチの箱のやうに白い壁で包んだ外側、ところ／＼に切つてある長方形のガラス窓。そして正面のボーチの前に、庭と云ふよりは寧ろちよつとした空地がある。と、先づそんな風な恰好で、中に住むよりは繪に畫いた方が面白さう